

ファインケミカルの集積地である関西のオンリーワン企業が市場のグローバル化で事業構造の変革を迫られている。樹脂やインキなどの着色に使われる油溶性黒色染料、ニグロシンの世界最大手で、来年創業100年を迎えるオリエント化学工業もそんな1社である。

ニグロシンは戦後、樹脂やインキだけでなく、塗料やカーボンペーパー、フアブリックインクリボン、それにトナー用の荷電制御剤など広範な分野で使われるようになり、同社は、年産4000ト(日米拠点合計)世界シェア50%超を誇る最大手に成長。さらなる成長を目指し高機能追求の新戦略を次々と立ち上げている。

自動車業界が樹脂部品の次世代接合法として導入を検討するレーザー溶着工法向けの色素「BINNDイーパインド」シリーズ(商

ニグロシン新用途開拓 レーザー溶着工法用など

品名)優れた可溶性が評価されインクジェット分野などへの本格供給が始まっている第3世代色素や、スーパーエンブラ向けの特殊グレード品など未来志向の新規のニグロシンを投入しており、顧客の評価も着実に高まっている。

ニグロシンは1867年に欧州で発見された染料だ。創業時に紺青顔料を手掛けていた同社の前身、オリエント商會が参入したのは日本も世界恐慌のおおりで不況に喘いでいた1931年。高橋昭博社長は、「当時の社会情勢と日本が今、置かれている状況はどこかに似ている。先輩たちがニグロシン事業に思い切った飛び込んだようにわれわれもチャレンジが必要だ。創業100年の17年は節目の年。新しい会社を創業する心構えで次代のビジネスモデル構築に全力で取り組むたい」と意気込んでいる。